

強みを活かして好きを究める授業づくり —進行性筋ジストロフィーのある生徒の指導方法の検討—

発達臨床支援高度化コース 20AD101

大島 啓輔

【指導教員】名越 斉子 葉石 光一 宗澤 忠雄

【キーワード】筋ジストロフィー ICF 実態把握 好き 強み

1. 問題の所在

(1) 研究の背景

肢体不自由特別支援学校に在籍する児童生徒は、意図していることと実際に動作することとのギャップが生じてしまうため、自発的に移動したり経験する物事が少なくなったりする。そのため、同年代の児童生徒に比べて意欲をもって物事にチャレンジする経験や物事をやり切る経験が少なくなることがある。また、興味・関心の幅が狭かったり、活動に受け身であったり、自信がなかったりすることがある(川間・西川, 2015)。そして、肢体不自由特別支援学校の教員は、児童生徒に卒業後に必要な知識や技能を習得させることに加え、自分のからだの状態や援助が必要なことについて理解し、自分なりの生活や仕事を続けていく力を育むことが求められる(河合, 2014)。

とりわけ、進行性筋ジストロフィーの児童生徒(以下、筋ジスの生徒)は、体が徐々に動かなくなっていくことによって無力感を覚え、何事にも消極的になってしまうことがある。そのため、筋ジスの生徒を担当する教員は、常に病気や障害の状態、程度に応じてその内容や方法を工夫していき、生徒が明確な進路の目標をもち、それに向かって学校生活を充実させていけるよう支援することが大切になってくる(松浦, 2017)。

(2) 勤務校における現状と課題

勤務校では、児童生徒一人一人の実態に応じた授業づくりを行うことを目的に、カード整理法を用いた実態把握を試みてきた。勤務校では、これを課題関連図と呼んでいる。課題関連図では、作成に関わる各教員が自立活動の6区分27項目から児童生徒の課題を出し合い、整理し共有している。勤務校での課題関連図の作成手順は表1に示す通りである。課題関連図の作成を通して、教員は抽出された生徒の3年後を見据えた長期目標と1年後を見据えた短期目標を設定し、教育活動全般の指導に活かしている。

表1. 勤務校での課題関連図の作成手順

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">① 課題を付箋に書きだしていく。② 付箋を出し合い共有し、似た課題同士をまとめる。③ 似た課題同士のまとまりに、タイトルをつける。④ まとまりの関係(背景要因)を考えながら、矢印や言葉を添えて関連付けていく。⑤ 指導支援内容を選定する。⑥ 具体的な目標(長期・短期)を設定する。 |
|--|

勤務校の高等学校に準ずる、または教科の目標や

学習内容の一部・又は全部を前各学年に替えて学習する教育課程を編成している学級(以下、一般学級)では、2年間で4名の生徒の課題関連図が作成された。作成対象となった生徒は、中学部からの進学生や高等部からの新入生など1年生が中心であり、脳性麻痺や脳疾患後遺症が起因疾患であった。

課題関連図の作成によって、作成に関わった教員達は、生徒の実態や指導支援の内容について共有する時間が確保できるという利点がある。しかし、筆者は現状の課題関連図に3つの問題が生じていると考えている。1つ目は、作成対象となっている一般学級の生徒は、自分の考えを言語で表出することができるにも関わらず、生徒の願いや興味に関する生徒の意見を考慮した作成ができていないことである。2つ目は、作成対象としてきた生徒の起因疾患に偏りがあり、多様な起因疾患を考慮して一人一人の実態に応じた授業づくりに課題関連図を活用しきれていないことである。3つ目は、生徒の困難に目が向きやすく、できることや得意なことなども含めた、今持っている力の把握や必要な支援の整理、共有がしきれていないことである。これらの問題を解決するために、生徒が自分自身の今持っている力、願いや興味を表出する手立てについて検討し、教員がこれらを把握し授業づくりに活用していくための留意点について検討していく必要があると考えた。

2. 研究の目的

勤務校の現状を踏まえ、高等部に在籍する筋ジスの生徒を対象に、生徒の今持っている力、願いや興味を授業づくりへ活用する際の留意点について整理することを目的とした。

3. 研究 I

(1) 研究 I の目的

研究 I では、生徒の今持っている力、願いや興味を把握するための方法と留意点について、文献研究をもとに整理していくことを目的とした。

(2) 研究 I の結果と考察

はじめに、筋ジスの生徒の障害に対して、できないことだけではなく、生徒の内面を含めた今持っている力を捉える必要があると考えた。そこで、肢体不自由の生徒への ICF の活用に関する文献を中心に調査した。辻岡・落合(2018)は、筋ジスの生徒の生活にかかわる方々が、ICF という共通言語を用いることで、生徒の自信が育まれていくことを一緒に感じ取ることができ、生徒の生きる力を大きく支え後押ししていると報告している。さらに西村

(2009)は、ICF の意義や目的について「①一人一人の子どもの障害による学習上又は生活上の困難を改善・克服する指導支援の糸口を多面的・総合的に

考えていくことができる。②子どもの将来の自立や社会参加の姿を描いて、長期的な視点を持って指導に当たっていくようになる。③個人の内的要素を尊重しながら、個人に合う課題や環境を考え、子どもをどのように支え育ていくべきか、深く考えることができる。」と述べている。2つの文献研究から、ICFの考え方をを用いて、筋ジスの生徒の今持っている力を把握する必要があることが示唆された。そのため、これまで作成してきた課題関連図について、ICFの要素を不足なく反映できているか整理していく必要があると考えた。そこで、過去に勤務校で作成してきた課題関連図について、ICFの障害構造の要素とのつながりを分析した。その結果、課題関連図では、作成に関わる教員間でICFの生活機能の項目について共有されており、環境因子を変える指導や支援の内容について話し合われていることが明確になった。また、課題関連図で共有されている中心課題は、ICFの「活動・参加」の項目に分類されているコミュニケーションや対人関係に関する要素であり、学習や生活に活用できる技能や知識の要素が少ないことがわかった。そこで、課題関連図の作成に関わる教員間で生徒の学習や生活に活用できる技能や知識を共有していくことが必要なのではないかと考えた。そのため、ICFの障害構造の「心身機能・身体構造」「活動・参加」から、筋ジスの生徒の実態にあった要素を抽出し、教員が生徒の今持っている力を把握するための共通観点として利用できるようにしていくこととした。

次に、生徒の意見を考慮した指導方法について検討していく必要があると考え、生徒自身の意見と選択を尊重して授業設計を行う Personalized Learning (以下、PL) についての文献研究を実施した。Bray & McClasky (2016) は、学習者から始まるという学習方法として PL を定義している。PL では、学習者が学びのエキスパートとなることを目的としている。学びのエキスパートとは、主体的に行動し、自分自身の学習を選択することができる学習者のことであると説明されている。学習者が学びのエキスパートになるためには、以下の手続きが必要であると述べられている。はじめに、学習者自身が自身の強みや好み、ニーズや課題について知ることである。次に、学習者は自分の願望や才能、興味について知り、自分の知っていることを表現するための方法について知ることである。また、学習者が学びのエキスパートになるために教員は、学習のガイドの役割を担い、学習者の意見と選択を取り入れながら学習内容を設計していく必要があると説明されている。つまり、生徒自身の願いや興味といった意見を取り入れた授業づくりをするためには、教員と生徒が共に生徒自身の好きや強みを共通認識していく必要があることが示唆された。なお、本研究において『好き』と『強み』は以下のように定義した。『好き』は、自分にしかわからない情熱をささげる物事や将来実現したい願いである。『強み』は、学習や日常生活において、うまくできる素質の特性や長所となるもの。また、本人の学習や日常生活におい

てプラスの働きをすると考えられる物的環境（ものや空間）や社会的環境（人間関係や制度）である。PLに関する文献研究から、生徒が自らの強みや好きを知るための手立てとして以下の3つのシートを作成し、研究Ⅱの実践授業に用いていくこととした。1つ目は、得意なことや興味のあることについて、理解を深めていくための自己理解シートである。2つ目は、将来実現したい願いや情熱をささげられるものについてまとめる目標シートである。3つ目は、目標達成に向けた行動を計画し振り返る自己評価シートである。

4. 研究Ⅱ

(1) 研究Ⅱの目的

筋ジスの生徒に対して（以下、対象生徒）、強みと好きを活かした授業を実践し振り返り、筋ジスの生徒にどのような変容をもたらしたか整理することを目的とした。また、教員が生徒の強みや好きを知ることで、対象生徒の教育活動に対して生じる変化について整理していくことを目的とした。

本稿では、研究Ⅱについて以下の4つに分けて報告する。1つ目は、勤務校の一般学級を担当する教員（以下、対象教員）の授業づくりについての現状の整理である。2つ目は、実践授業のための情報収集についてである。3つ目は、生徒の強みや好きを活用した実践授業についてである。4つ目は、研究Ⅱの成果である。

(2) 一般学級の授業づくりの現状の整理

対象教員の授業づくりにおける現状を整理することを目的とした。

はじめに、本研究における強みと好きの定義について対象教員に説明し、質問紙調査及びインタビュー調査を実施した。対象教員が生徒の強みや好きを活用した今までの実践や、授業づくりでの困りごとの有無について現状を整理した。

質問項目と回答人数については以下の通りであった。なお、それぞれの質問項目について「実践していた」または「ある」と回答した教員の人数の算出に際し、インタビュー調査の回答結果も考慮した。

表 2. 授業づくりについての質問項目と回答人数

質問項目	回答人数
1. 生徒が自ら考えた目標を達成できる授業をしていた。	2名
2. 生徒の将来の生活につながる授業をしていた。	2名
3. 生徒の得意なことや興味関心のあることを活かした授業をしていた。	1名
4. 生徒の得意なことを増やしたり、興味関心を広げたりすることができる授業をしていた。	2名
5. 生徒が自らの学習を振り返る機会を設定した。	1名
6. 授業づくりで困っていることや悩んでいることがある。	2名

質問項目1では、生徒自身で学習課題を選択する機会を設けることで、自らの目標を達成できるような授業を実践しているという回答があった。しかしながら担当する教科によっては、生徒自身が達成したい目標と教科の学習内容と結びつけて設定していくことが難しいという意見があげられた。

質問項目3では、得意なことや興味のあることを授業と結びつける際の問題について2点あげられた。1点目は、教科の学習内容によっては、生徒の好きなことや興味のあることと学習内容をつなげることが難しいことがあること。2点目は、生徒自身が自分の好きなことややりたいことについて理解できていないと感じることである。

質問項目4では、生徒の興味関心が高いタブレット端末を活用した授業を実践し、授業で学んだことを活かして生徒自身でタブレット端末の活用方法を発展させていったという実践があげられた。しかし、教科のすべての学習内容で生徒の得意なことを活かしたり、興味関心を広げたりする授業を実践することは難しいという課題があげられた。

質問項目6では、困っていることや悩んでいることとして3点あげられた。1点目は、生徒の将来につながる学習内容や興味関心に合わせた内容の授業づくりのための課題を探すことが難しいことである。2点目は、それぞれの生徒のこれまでの学習内容や生活状況の把握が不十分だと感じることがあり、生徒の実態に合わせた教科の内容を設定することに困ってしまうことである。3点目は、生徒の障害に応じた授業づくりを実践することに悩んでいることである。

上記の結果から対象教員は、生徒の目標を達成できるような授業、得意なことや興味を広げる授業を実践してきたことが示された。具体的には、勤務校の学校設定教科『産業社会と人間』の中で、生徒が自らの目標達成に向けて取り組める授業や得意なこと、興味を広げる授業を実践しているということがわかった。これは勤務校の年間指導計画に、生徒自身が目標を設定し評価する単元が設定されていることが要因であると考えられる。しかし、生徒自らの得意なことや興味関心のあることについて理解する機会や、取り組んできたことを振り返る機会が不足していることが示唆された。また教員間で、生徒が目標達成に向けて取り組んでいることや取り組んでいくべきことについて、共有しきれていないことが示唆された。そこで、生徒が自分自身の強みや好きなことについて理解する機会を設けることで強みや好きを活かした授業づくりの実践が増えていくのではないかと考えた。そのため、『産業社会と人間』の授業内で、好きなことに向けて取り組む行動を計画する機会や、好きなことについて定期的に振り返る機会を取り入れた実践をしていくこととした。さらに、教員間で生徒の強みや好きを共有するため、情報収集していく必要があると考えた。そのため、課題関連図を活用し教員間で生徒自身が考えた強みや好きについて共有していくこととした。

(3) 実践授業に向けた情報収集

1) 生徒の自己理解

生徒自身の強みや好きなことについての情報収集することを目的とした。また、生徒が自分自身の強みや好きを理解するための手立てについて検討していくことを目的とした。

はじめに、対象生徒を含む一般学級の生徒に対し

て、自己理解シートと目標シートを活用した授業(202x年4月)を実践した。実践授業の結果、対象生徒2名(以下、生徒x、生徒yと記す。)の強みや好きは以下の通りであった。

表3. 生徒xの強みと好きなこと

強み	・パソコンを操作すること (好きな曲のCDを作る・文章作成・物事を調べること)
好き	・ITパスポートの取得と同等の力を得ること

表4. 生徒yの強みと好きなこと

強み	・パソコンのタイピング ・人の話を聞くこと
好き	・将棋アプリを使って将棋を打つこと。 ・動画を編集すること。 ・プログラミングを学ぶこと

次に、対象教員3名と強みや好きを理解するための授業を振り返り、自己理解シートや目標シートを活用する利点や改善点についての意見を聴取した。その結果、自己理解シートと目標シートを活用する利点は3点あげられた。1点目は、生徒が自身を客観的に見る良い機会となったことである。2点目は、生徒が他者から言われてうれしかったことを振り返り、記入することで生徒の自己肯定感を高めるきっかけとなったことである。3点目は、生徒自身が目標達成に向けて取り組んでいる現状を振り返る良い機会となったことである。さらに、生徒自身で目標達成に向けて、今後何をすべきかを段階的に整理していくことによって、今後の自分自身の行動につながるきっかけを作る良い機会となったことである。しかし、自己理解シートと目標シートを活用していくための改善点として3点があげられた。1点目は、対象生徒に比べて言語での理解に困難がある生徒は、自己理解シートの各項目に記入する内容が重複してしまう可能性があったことである。2点目は、一緒に達成したい人や助けが必要な人について考える項目があったが、生徒にとってこれらの人についてイメージしづらいことである。3点目は、記入する内容は学校生活のことを書くのか、家庭生活のことを書くのか理解しにくかったことである。

実践授業の結果から、自己理解シートや目標シートを活用することで、対象生徒は自分自身で強みや好きなことについて理解していくことができたと考えられる。そのため、今回の実践で表出された強みや好きを共有することで、生徒の強みや好きを考慮した課題関連図が作成できると考えられる。しかし、対象生徒以外の生徒の授業中の様子を振り返ると「何を記入してよいかわからない。」といった質問があげられていた。このことから、対象生徒以外の生徒の中には、自己理解シートと目標シートに対して障壁が生じてしまっていることがわかった。そのため、生徒自身で強みや好きなことについて理解を深めていくための支援について再検討していく必要があると考えられる。また対象教員から聴取した意見から、自己理解シートや目標シートの質問項目

に記入する内容について、共通理解しきれなかったことが示唆された。そこで、対象教員から聴取した意見をもとに、これらのシートをそれぞれの生徒の実態に応じて活用していけるように改良していくことが必要であることが示唆された。

2) 課題関連図の作成

対象生徒の強みや好きを考慮することで、課題関連図の指導支援内容にどのような変容をもたらしたか整理していくことを目的とした。

筆者が進行役となり、対象教員3名とともに、生徒xと生徒yの課題関連図を作成した。なお、課題関連図を作成する前に以下の2点について対象教員に説明した。1点目は、生徒自身の強みや好きについて共有してから作成をはじめることである。2点目は、生徒の強みと課題をICFの障害構造の要素から、対象生徒の実態にあったものを抽出した観点で把握し、共有していくことである。対象教員への説明後、作成された課題関連図で選定された指導支援内容や具体的目標と対象生徒の強みや好きとのつながりについて整理した。また、対象教員3名に対して、今回の課題関連図作成で効果的だったことや、引き続き実践していくために難しいと思われることについて意見を聴取し整理した。

課題関連図の作成の結果、生徒xと生徒yの指導支援内容、具体的な目標については以下の通り選定された。

表 5. 生徒 x の指導支援内容と具体的目標

<指導支援内容>

- ・好きなことについて調べてまとめていき、まとめたことを教員や友達に伝える機会を設ける。
- ・好きなことを調べる中で、外との関わりに気づかせていく。

<具体的目標>

- ・好きなことについて学んでいく中で、自分の考えや気持ちを表現する力を身に付ける。
- ・好きなことを通して外出する必要性について理解する。

表 6. 生徒 y の指導支援内容と具体的目標

<指導支援内容>

- ・好きなことについて自分で取り組んでいる成果を発表し、友達との関わりを増やしていく。
- ・好きなことに関係づけて外へ出る機会を増やしていく。

<具体的目標>

- ・よりよい人間関係作りへの理解を深める。
- ・好きなことを通して外出する必要性について理解する。

なお、生徒xと生徒yともに以下2点の強みが共有された。1点目は、ICT機器の知識や活用に長けていることである。2点目は、コミュニケーション能力が高いことである。これらの強みや対象生徒それぞれから表出された好きとのつながりを持たせた指導支援内容が選定された。また、生徒が好きなことに取り組んでいくことで期待できる成果と関わりを持たせた具体的目標が選定された。

今回の課題関連図の作成において対象教員から、生徒の強みや好きを共有することにより、生徒の好

きなことを活かして課題関連図を作成していくことができるようになったという意見があげられた。しかし、ICFの要素を用いて強みや課題を把握するには、学校生活以外の面を把握しなければならないため、難しさを感じるという意見があげられた。

以上の結果から、課題関連図を作成する際に、本人の強みや好きを共有することで、それらと関わる指導支援内容や具体的目標が選定されることがわかった。また、筋ジムの生徒の課題関連図を作成することが示された。さらに、ICFの考え方を取り入れることによって、生徒の強みや課題について多角的・総合的な視点で把握していく考え方を共有できるようになった。しかし、生徒の強みや好きなこととICFの要素とのつながりについて教員間で検討しきれなかった。これより、今後の課題関連図の作成において、生徒の強みや好きについてICFの障害構造の要素とのつながりを整理し、検討していくことが必要であると考えられる。

(4) 強みや好きを活用した実践授業

1) 目的・方法

課題関連図の作成を通して選定した指導支援内容を活用し、生徒自身で好きなことに取り組むための行動を計画し自己評価する授業を実践し、振り返ることで、対象生徒や他の生徒の変容、対象教員の指導の変容について整理することを目的とした。また、本実践授業の改善点及び課題関連図とのつながりについて整理していくことを目的とした。

筆者が対象生徒を含めた一般学級の生徒を対象に、3か月ごと(202x年6月・9月・12月)に計3回の授業を実践した。各回の授業は、以下の流れで実践した。はじめに、生徒が目標シートの中から一番好きなことを選択した。また、自己評価シートを用いて、好きなことに対して自分自身で取り組む行動について計画した。次に、各教員が生徒自身で考えた具体的な行動に対して、気になる点や詳しく知りたい点について質問した。最後に、生徒が各教員から質問されたことに回答していき、好きなことについて取り組んでいく行動についてまとめ、発表した。なお、実践授業の2回目以降は、生徒が具体的な行動を計画する前に、3か月前に計画した具体的な行動について、計画通りにできたことや改善していくこと、目標達成のために困っていることについて振り返る機会を取り入れた。それに加えて、生徒の振り返りに対して、教員が評価やアドバイスをする機会を取り入れた。本実践において、好きなことに取り組むための行動を計画し、自己評価していくことを「好きを究める」という表現を用いる。

各回の実践授業後、対象教員3名に対して以下の4点についての質問紙調査を実施し、あげられた意見について要点を整理していった。1点目は、それぞれの対象生徒の変容についてである。2点目は、本実践授業の改善点についてである。3点目は、対象生徒に対する授業内容と課題関連図とのつながりについてである。4点目は、対象生徒以外の生徒の変容や支援についてである。

2) 結果・考察

生徒 x は『IT パスポートの合格又は合格と同じくらいの力をつけたい。』、生徒 y は『文字 PV を完成させる。』を究めていきたいこととした。

はじめに、それぞれの対象生徒の変容についての整理していった。生徒 x については、以下の3点の変容があげられた。1点目は、自分自身の将来とのつながりを考え、見通しを持って具体的な行動を計画することができるようになっていったことである。特に、計画を実行するために必要な支援や情報をしっかりと分析できるようになってきたという意見があげられた。2点目は、自ら考えていく力が身についたことである。例えば、自分の好きなことについて取り組んでいくべきことを、教員に質問するといった自分自身の周りの環境を活かした行動をとることができるようになったという意見があげられた。また、実践授業を繰り返すことで、自分なりの勉強方法を見つける姿が見られるようになったという意見があげられた。3点目は、自信を持って行動することができるようになってきたことである。具体的には、好きなことに向けて取り組んでいる成果を、授業中に積極的に表出するといった姿がみられるようになったという意見があげられた。生徒 y の変容として、以下の3点があげられた。1点目は、興味関心の幅が広がってきたことである。特に、好きなことに向けての取り組みを行っていくことで、多くのことに興味関心を持つ姿が見られるようになったことがあげられた。2点目は、自己分析ができるようになってきたことである。例えば、実践授業を繰り返していく中で、自分自身に足りないことについて分析し足りないことを補うためにはどうすればよいか、創意工夫しながら取り組んでいくことができるようになったという意見があげられた。3点目は、知りたいことについて追及していく力が身についてきたことである。これより、対象生徒は実践授業を積み重ねていく中で、自分自身の将来のために必要な力や支援について理解を深め、自分自身の強みと結びつけた取り組みを計画していくことができるようになったことが示された。

次に、各回の実践授業での改善点について整理していった。改善点は以下の2点にまとめられた。1点目は、対象生徒が好きなことに向けての取り組みを考える際に、教員は対象生徒それぞれの好きなことを考えるための支援について検討していく必要があったことである。2点目は、生徒が好きなことに取り組む理由や将来の生活にどのように活かせるのか理解する必要があったことである。これより、実践授業の流れや支援の内容について再検討していく必要があることが示唆された。

その次に、課題関連図と対象教員が研究期間内で実施してきた授業とのつながりについて整理していった。授業づくりに活用できそうなこととして以下の3点があげられた。1点目は、教員が対象生徒の強みや好きとつながりを持った発問や課題を作成することである。2点目は、教員が目標達成に向けた具体的な行動を生徒と一緒に考え、生徒の外出することへの興味関心を高める指導を実践していくことである。3点

目は、教員が授業を通して対象生徒が学びやすい学習方法や伝わりやすい表現方法を指導していくことである。これらの意見から、課題関連図で選定した指導支援内容が対象教員の授業づくりに活用していくことができるようになったのではないかと考えられる。

最後に、対象生徒以外の生徒の変容や支援について整理していった。対象生徒以外の生徒は、本実践授業を実施したことにより、好きなことに向けて取り組んでいることがステップアップしていることを実感していたという意見があげられた。その結果、好きなことに対しての意欲が向上していったことが示唆された。しかし、生徒によっては成果を可視化するのが難しかったり、取り組みの成果を実感しにくかったりするといった課題があげられた。そのため、達成感を味わえる支援について検討していく必要があったと考えられる。

以上の結果から、強みを活かして好きを究める授業実践の成果として、以下の3点があげられる。1点目は、生徒が自分自身の強みと結び付けて自らの学びの方法を検討していくことができるようになったことである。2点目は、生徒が自分自身の生活と好きを究めていくための行動を結びつけ、創意工夫して取り組むことができるようになったことである。これら2点の変容が見られた要因として、生徒が生徒自身で好きなことを1つに選択して、好きなことに取り組むための具体的な行動を計画し、行動に対しての自己評価を繰り返していくという指導方法を取り入れたためではないかと考えられる。3点目は、対象教員が生徒の好きを究めていくための行動を支え、具体的な行動を実行することを後押しするといった役割を果たす意識が向上したことである。しかし、実践授業中の生徒の様子から、好きなことについて具体的な行動を計画する時や、計画した行動の成果や改善点について振り返る時に、生徒の実態に応じた支援を検討する必要があったと考えられる。

(5) 研究Ⅱの成果

研究Ⅱの成果について、対象生徒の自尊感情と対象教員の研究Ⅱでの取り組みに対する意見から整理していく。

はじめに、生徒が自分自身の強みや好きを理解し、好きなことを究めていくことでの変容について、対象生徒の自尊感情・自己肯定感の変化を読み取り、成果について整理していくこととした。自尊感情や自己肯定感の高い傾向のある生徒は、進路の目標が明確で、友人関係も良好であると述べられている(東京都教職員研修センター, 2012)。なお、自尊感情とは自分のできることやできないことなど、すべての要素を包括した意味での自分を、他者との関わり合いを通してかけがえのない存在、価値ある存在としてとらえる気持ちと定義されている。これより、本実践を通して対象生徒が明確な進路の目標を持ち、目標達成に向けて取り組んだことにより、自尊感情や自己肯定感が高まったのではないかと考えた。

そこで、勤務校で以前から活用されている自尊感

情測定尺度（東京都版）自己評価シート（以下、自尊感情測定尺度）を用いた質問紙調査を、実践授業前（202x年4月）と実践授業後（202x年12月）の計2回実施した。自尊感情測定尺度では、自尊感情を以下の3つの観点で捉えて点数化している。1つ目は、自分のよさを実感し、自分を肯定的に認められる『自己評価・自己受容』である。なお、この観点は、教員との関係においての影響が大きいことから、教員からの評価や言葉掛けによる効果が期待できると述べられている。2つ目は、多様な人との関わりを通して、自分が周りの人に役立っていることや周りの人の存在の大きさに気付く『関係の中での自己』である。3つ目は、今の自分を受け止め、自分の可能性について気付く『自己主張・自己決定』である。

対象生徒の自尊感情のそれぞれの観点についての点数の変化は、以下の通りであった。

表7. 対象生徒の自尊感情について

		生徒 x	生徒 y
自己評価・自己受容	実践前	3.75	3.13
	実践後	3.50	2.75
関係の中での自己	実践前	4.00	3.86
	実践後	4.00	3.71
自己主張・自己決定	実践前	3.86	3.86
	実践後	3.86	3.14

調査の結果、対象生徒2名ともに『自己評価・自己受容』の数値が低下した。この結果から、対象生徒が、思っているよりも好きなことへの取り組みがうまくいかなかったと感じてしまったことが考えられる。なぜならば、対象生徒2名とも、究めていきたいことに対して具体的な成果が本研究期間で得られなかったためである。また、好きなことへの行動を計画していく中で、どのようなことに取り組めばよいか悩んでいる様子が見られた。そのため、教員からの評価やアドバイスを参考にしよう促したが、対象生徒それぞれの困りごとに対しての解決につながらなかったことも要因だったであろう。そのため、生徒が好きを究めていくためには、教員の評価や関わり方について検討していく必要があることが示唆された。さらに、生徒 y は『関係の中での自己』と『自己主張・自己決定』の点数も減少するという結果だった。このことから、好きなことが周りの人の役に立っていくことや、周りの人と共に解決していく方法について確認していく必要があったと考えられる。また、好きなことに取り組むことでの自分自身の成長や、可能性の広がりについて確認していく必要があったことが示唆された。

次に、研究Ⅱを通して授業づくりの手助けになったことや参考になったことについて、対象教員から意見を聴取し、成果や今後の課題について整理していくこととした。質問項目と回答人数については表8の通りであった。なお、それぞれの質問項目について「なった」「できた」「あった」と回答した教員の人数の算出に際し、インタビュー調査の回答結果も考慮した。

表8. 研究Ⅱの参考点についての質問項目と回答人数

質問項目	回答人数
1. 生徒の目標は、授業づくりの手助けになった。	1名
2. 生徒の考えた行動内容は、授業内容に取り入れることができた。	1名
3. 課題関連図で選定した指導支援内容を参考にした授業を実践した。	0名
4. 今年度の取り組みを通して、授業づくりに参考になる点があった。	3名

質問項目3では、すべての対象教員が課題関連図で選定した指導支援内容が授業づくりの参考にならなかったと回答した。参考にならなかった理由は、選定した指導支援内容をどのように授業づくりに取り入れていけばよいかわからなかったためという意見があげられた。そのため、課題関連図の作成を通して選定した指導支援内容を授業に活用するために、各教科の指導目標や指導内容とのつながりを検討することが必要であったことが示唆された。そして、好きなことに取り組むことで身に付けられる資質能力について、検討していく必要があることが考えられる。

質問項目4では、3つの参考点があげられた。1つ目は、生徒自身で取り組む行動を計画することで、生徒が学習に取り組むきっかけを作ることや、意欲を向上させることができるということがわかったことである。例えば、生徒自身が目標を立て、行動内容を考えていくという授業づくりの実践を考えるきっかけになったという意見があげられた。2つ目は、好きなことを1つに絞ったことによる効果として、生徒が自分自身の行動の成果と改善点を考えていきやすくなり、それぞれの生徒が自己評価をしやすくなったことである。3つ目は、生徒の実態によって様々な指導方法を取り入れていく必要があることに気付いたことである。具体的な回答として、これまでは生徒が知っていること又は調べたことについて生徒自身でまとめて発表することで、知識技能の習得が図れると考えていた。しかし、生徒によっては対話問題を増やすことで知識技能の習得が進むなど、生徒によって様々な理解の方法があることがわかった。そのため、生徒の実態に合わせた指導方法を検討していく必要があることに気づくことができたという意見があげられた。しかし、今年度の取り組みを継続していくための修正点として2点があげられた。1点目は、教科の学習内容と離れている目標もあったため、学校生活とつなげられるように指導していく必要があったことである。2点目は、勤務校の生徒は、好きなことと結びつけて自らの行動を計画していく知識や経験が少ないため、それらに対する支援を検討していかなければならないということである。

対象教員からあげられた意見をまとめると、生徒の強みを活かして好きを究める授業づくりを実践していくことで、生徒の意欲の向上につながるということを教員間で共有することができたことが示唆された。また、生徒の実態に合わせた情報の提示や意見の表出方法を検討していくことが必要であること

を共有することができたと考えられる。しかし、生徒の強みや好きなことを授業づくりに活用していくことは各教科の特性によって難しさが生じることがわかった。そのため、生徒の好きなことと各教科の指導目標や指導内容とのつながりを検討していくことが、授業づくりに活用していくために必要になってくると考えられる。

5. 成果

本研究の成果は、以下の2つに分けて報告する。1つ目は、生徒の変容についてである。生徒の変容は、先行研究を参考に自信づくりの視点と主体性の向上から整理していくこととした。2つ目は、課題関連図の指導支援内容の変容についてである。

(1) 生徒の変容

はじめに、生徒の自信の変容から成果を報告していく。辻岡・落合(2018)は、自信づくりについて以下の3つの視点で定義している。1つ目は、生徒本人が自分自身で感じとる『相対的自信』である。これは、何かを習得した時の喜びや、やり遂げたといった体験を通して自信をつけていくことができると述べられている。2つ目は、友達や教員など生徒を取り巻く人たちが生徒を評価することで得られる『客観的自信』である。3つ目は、相対的自信と客観的自信との関わりから生まれてくる『絶対的自信』である。また、絶対的自信の向上が自分自身で考えた目標を達成しようとしたり、身体的機能を改善・克服しようとしたりする力を強く後押しすると述べている。

本研究で生徒xは、目標達成に向けて取り組んでいる学習の成果を授業の中で積極的に発信する様子が増えていった。同様に生徒yは、タブレット端末を活用する役割の仕事を積極的に担っていく様子が見られるようになった。また、一般学級に在籍する他の生徒に対してタブレット端末の活用のアイデアを伝える様子が見られるようになった。

以上の対象生徒の変容から、生徒自身で目標達成に向けた具体的な行動を考え、振り返ることで相対的自信の向上につながったことが考えられた。また、教員からの評価やアドバイスを交えて具体的な行動について振り返ったことで客観的自信の向上にもつながったと考えられた。そして、相対的自信と客観的自信が向上したことにより、生徒の絶対的自信を向上させることができたのではないだろうかと考えた。しかし、対象生徒の自尊感情の変化から、辻岡・落合の述べている理想的な絶対的自信の向上にはつながらなかったことが示唆された。その要因として、対象生徒が何かを習得した時の喜びややり遂げた体験が不足していたことが考えられる。その結果、本研究は相対的な自信の理想的な向上を図る指導とはならなかったと考えられる。今後は、相対的な自身の向上を意識した授業づくりが必要になってくると考えられる。

次に、生徒の主体性の変容から成果を整理していく。PLでは、生徒が主体的に行動し、自分自身の学習を選択することができるようになることを学びのエキスパートと説明し、生徒が学びのエキスパート

となることが目的とされている。

生徒xは、自分自身で達成したい目標を明確にすることができ、目標達成に向けて具体的な行動を計画していくことができるようになった。また、自分自身で取り組んでいることを把握しながら振り返りを行うことができるようになっていった。それに加えて、目標達成に向けて自身の強みと学習方法を結び付けて考えていくことができるようになっていった。例えば、教科学習の際にタブレット端末とマウスを活用して授業を受けることを自ら提案するという姿が見られた。また、タブレット端末を活用し重要語句を表にまとめていたりするといった勉強方法を実践していく姿が見られた。さらに、対話的な学習が得意であることに気づき、教員との一問一答形式での学習を実施していく姿が見られた。生徒yは、目標達成に向けて自分に足りない力や環境について整理していくことができるようになっていった。特に、現在できていることとこれからやらなければいけないことを整理して目標達成に向けた取り組みを考えていくことができるようになっていった。例えば、新たなアイデアを発想する力が弱いということを自己分析することで理解し、アイデアを発想するためには知識を得ていくことが必要であると考えようになっていった。そして、自分の足りない知識の部分埋めるために、好きなことと関わりのあることについて調べていくようになった。また、動画を作成するアプリの機能について調べていくことで、創意工夫をしながら好きなことに向けた行動に取り組んでいくことができるようになった。

対象生徒のこれらの変容から、対象生徒が目標を明確に理解し、目標達成に向けて自らの学びの方法を自己調整しながら行動に取り組み、学ぶ意味や重要性を見出し学び続けることができるようになってきたことが示唆された。つまり、対象生徒が学びのエキスパートになっていくことができたと考えられる。対象生徒が、学びのエキスパートへと成長していくことができた要因として、好きなことを一つに絞ったことにより、より目標を明確にしていけることができ、学ぶ意味や将来とのつながりについて検討していくことができるようになったためではないかと考えられる。また、定期的に生徒自身が行ってきた行動について振り返ったことで、学びの方法や取り組みについて調整していくことができるようになったと考えられる。さらに、各生徒に対して教員の評価やアドバイスがあったことが、対象生徒の学びの方法や取り組みを自己調整する選択肢を増やしたと考えられる。しかし、対象生徒以外の中には、自分自身の強みや好きなことについて何を書いたら良いのかわからないといった、理解に対する困難が生じてしまうことがわかった。合わせて、好きなことについての具体的な行動を計画していくことや、行動してきたことを自己評価していくことに対して困難が生じてしまうことがわかった。そのため、生徒が強みや好きを理解するための手立てや、支援内容について検討していかなければならないことが示唆された。

(2) 課題関連図の指導支援の変容

最後に、課題関連図の指導支援内容の変容について整理していく。課題関連図の作成の際に、生徒の好きや強みを教員間で共有することによって、生徒が好きなことに取り組むことで得られる成果を基に指導支援内容を考えることができるようになった。また、生徒の学習上又は生活上の課題について多角的・総合的に把握することができた。これらの結果は、西村(2009)が述べるICFの考え方を教育に踏まえることの意義や目的を示す結果となったと示唆された。また、実践授業を通して各教員は、生徒が好きなことに対して取り組んできたことについて、生徒の強みと関連付けて評価することができるようになっていった。さらに、生徒が好きなことについての具体的な行動を考える際の行動指針となるアドバイスを送ることができるようになっていった。このことより、生徒の好きなことを取り入れて指導支援内容を考えたことにより、生徒が好きなことを究めていくための行動指針を示すといった考え方の変化が生じたことが示唆された。このような教員の変容は、Bray & McClasky (2016) が説明する、PLでの教員の役割を示す結果となったと考えられる。

以上の結果から、課題関連図の作成の際に生徒の好きや強みを教員間で共有することによって、生徒の意見を考慮した指導支援内容を検討していけるようになった。また、生徒の困難さだけでなく今持っている力を多角的・総合的に把握することができ、筋ジムの生徒の実態に応じた授業づくりのための指導法について検討していくことができたのではないかと考えられる。しかし、対象教員から聴取した意見から、生徒の強みや好きを知ることが授業づくりの手助けにつながっていないということが明らかとなった。このことから、生徒が好きなことに取り組むことで身に付けることができる力と各教科の目標や内容とのつながりについて、整理していく必要があることが示唆された。また、各教員のICFの考え方の理解を深める必要があると考えられる。

6. まとめと今後の課題

本研究を通して、筋ジムの生徒の強みや好きを授業づくりへ活用していくための留意点として以下の2点があげられる。1点目は、生徒が自分自身の強みや好きについて理解を深めていくことである。また、生徒自身で好きなことに向けて行動を計画し、取り組んできたことを定期的に振り返っていくことである。2点目は、好きなことに取り組むことで身に付けることができる力と教科の目標や内容とのつながりを整理していくことである。そして、整理されたものを生徒と共に確認し、それらをもとに生徒は自己評価し、教員は生徒の取り組みに対して評価やアドバイスをしていくことである。なお、本研究で見られた対象生徒の変容については、これまでの成長や他の授業の影響も考えられる。そのため、これらの留意点を考慮した実践について、長期的に検討していくことが必要であると考えられる。また、対象教員の半数は勤務校での手順で課題関連図を作成した経験がなかった。そのため、生徒の強みや好

きを共有した課題関連図の作成を継続的に実施していく必要があると考えられる。

以上を踏まえて、生徒の願いや興味、今持っている力を授業づくりに活用していくための今後の課題として3点があげられる。1点目は、生徒の実態に応じた強みを把握するための手立てについて検討していくことである。また、生徒自身で好きを究めることができるようになるための力を身に付けていく指導について検討していくことである。そのために、本研究で活用したシートについて、わかりやすい表現に改良していくなど工夫し、段階的に好きを究めていくことができるような手立てについて検討していく。そして、生徒が自己を多様な視点から理解することができるような授業を実践し、評価改善していく必要があると考えられる。2点目は、生徒の好きなことと各教科の目標や内容とのつながりについて整理していくことである。そのために、生徒が好きなことに取り組むために、身に付けていかなければならない知識技能と各教科の目標や内容との結びつきについて整理し、それらを生徒と共に確認していくことが必要であると考えられる。3点目は、各教員がICFの考え方について理解を深めていくことである。そのために、ICFの考え方をを用いて、生徒が好きなことに取り組むために、どのような人の力が必要なのか、どのような支援が必要なのかといった人的環境や物的環境を整理していくことが必要になると考えられる。また、整理されたものの中から、生徒の生活の中ですでにあるものとこれから必要になってくるものを整理していくことが必要になってくるであろう。これらの取り組みを継続して取り組んでいくことで、各教員のICFの考え方の理解を深めていくことができると考えられる。

【主な参考文献・引用文献】

- 川間健之助・西川公司(2015)改訂版 肢体不自由児の教育.放送大学教材.
- 猪狩恵美子・河合隆平・櫻井宏明(2014)テキスト 肢体不自由教育-子ども理解と教育実践-.全障研出版部.
- 松浦俊弥(2017)チームで育む病気の子ども-新しい病弱教育の理論と実践-.北樹出版.
- 辻岡順・落合俊郎(2018)病弱教育,肢体不自由教育におけるICFから捉えた『自信づくり』.大和大学研究紀要,4,13-20.
- 上田敏(2005)ICFの理解と活用-人が『生きること』『生きることの困難(障害)』をどうとらえるか.きょうされん.
- 西村修一(2009)子どもの見方がわかるICF-特別支援教育への活用.クリエイツかもがわ.
- Barbara Bray・Kathleen McClaskey(2016). How to Personalize Learning. Corwin.
- 文部科学省(2019)特別支援学校教育要領・学習指導要領解説自立活動編.2019年3月,
https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/fieldfile/2019/02/04/1399950_5.pdf
(2021年1月27日)
- 東京都教職員研修センター(2013)自信 やる気 確かな自我を育てるために-子どもの自尊感情や自己肯定感を高める指導資料-
https://www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.lg.jp/09seika/reports/files/bulletin/h23/materials/h23_mat01c_02.pdf(2021年2月3日)